

---

# パピル・パピルスの魔法旅行記 ホンザの道標

藻ノかたり

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

パピル・パピルスの魔法旅行記      ホンザの道標

### 【Nコード】

N5277P

### 【作者名】

藻ノ かたり

### 【あらすじ】

外見が15歳の老齢な高位魔術師パピル・パピルス。彼はある目的のために旅を続ける……。

## 序章にかえて

\*\*\*\*\*

ボクの旅が始まってから、もうどれくらいの時間がたつのだろうか。目指す”エンズ・ハイ・ホセキス”は今どこに存在するのか。

いや、本当のところ、ボクはエンズ・ハイ・ホセキスに出会う事を願っているのだろうか……。

ボクは”エンズ・ハイ・ホセキス”と共存できるのだろうか、それともどちらかが滅びるまで戦い続けるのだろうか。

\*\*\*\*\*

## 甲板にて……。物語のはじまり

ここはデユリガルド大陸からさほど遠くないレスリア海。秋も深まる中、大陸最東端の港、ホンザへ向かう中型客船ポンケネウレ号の船上である。

「こりゃあ、何にも見えないな……」

一人の少年が甲板から遙か彼方を見つめて、つぶやいた。舳先の行方には何とも白濁とした濃霧が立ちこめ、彼方に見えるはずの大陸を全く存在しないかのように覆い隠している。ここまでくれば長かった三週間の船旅もようやく終わり、明日になれば晴れてデユリガルドの地へと足を踏み入れる事が出来るはずだ。しかし立ちこめる霧のせいで、大陸は蜃気楼ほどの危うさでさえ、姿を見せてはいない。

「デユリガルドか……。ここへ来るのは二十年ぶりかな。リケルトは元気にしているだろうか」

少年は未だ姿を現さぬ大陸に想いをはせながら、そうささやいた。彼は旅の途中の魔法使いパピル・パピルス。年の頃は十五歳といったところだが、実際の年齢は遙かにそれを上回っている。また彼は「マスターマーク・オブ・マジックギルド」の称号を得ている高位の魔法使いのだが、目立つのを避ける為、よほどの事がない限りそれを表明するのを避けているのだった。

彼は、ある目的のために長い間、旅をしている。幾とせの年月が、彼と友人達との間を死をもって引き裂いた。しかし”それ”が見つかる気配は未だ見えてこない。今度のデユリガルド行きも、ほんの

小さな噂を聞きつけたという、何とも頼りない理由からだった。

しかし彼は”それ”を見つけたし決着を付けなければならぬ。  
”エンズ・ハイ・ホセキス” それが何なのかは彼しか知らない。  
余人に知られてはならないのだ、絶対に。もし知られば、この世界は大混乱に陥るだろう。その前に何としても決着を付けなければならぬ。

パピルは考える。あれはもう活動を始めているのだろうか。いやボクの魔法で進化は止めた。進化を止めた以上、あれは能力のほとんどを使うことは出来ないだろう。実際、ボクの知る限り、世の中に変化は起きていない。それは奴が活動していない何よりの証拠だ。

彼は祈るような気持ちで、そう考える事にしていった。そう考えねば、自分の犯した罪の重さに彼自身が押しつぶされてしまうだろう。デュリガルド大陸でも恐らくそれは見つかるまい。しかし長い旅の末、彼はそれと出会わない事を心のどこかで祈っている自分自身にも気づいていた。

ボクは、あれと正面きつて対峙できるんだろうか。ボクは未だに、あれを倒すべき存在として考えるのか、それとも共存すべきなのか、まだ結論を出せずにいる。あれを倒す事が本当世界のためになるのか、混乱を引き起こしてでも世界を変革させるべきなのか……。パピルの心は洋上に漂う重く濁った白霧のように、さまよい移ろっていた。

「よう、坊主。一人旅かい」

ふいにパピルの後ろから男の声がした。パピルが振り返ると、そこには一人の屈強な船乗り風の男性。年齢は四十少し前か。癖のあ

る長髪を凝った装飾のいわえ金具で縛っている。

「その出で立ちからすると、見習い魔法使いってところかな。修行をする旅の途中かい」

無精ひげが生えている口元を存分に動かしながら、人なつっこく話しかけてくるこの男。パピルは”長い”人生経験から、即座に、この男が悪い人間ではないと判断した。

「ええ、セルフオードにいる叔父の所へ。旅の途中、色々修行もさせてもらっています」

本当は叔父ではなく、三十年来の友人を訪ねるのであるが、まさか本当の事を言うわけにもいかず、適当にごまかすパピルであった。

「セルフオードといやあ、大陸中央の大都市だ。明日、寄港するホンザ港から、まだかなり遠い道のりだな。いや、若いのに大変なこつたねえ」

「いや、もう慣れました。慣れてしまえば楽しい事も結構多いです。ただ、この霧の中、三週間も船に揺られているのは一寸こたえます」

パピルの言葉に嘘はなかった。今まで船旅はいくらもあったが、三週間の行程の内、ほとんどの天候は霧。おまけに今回はワケあって、大半の時間を個室で過ごしていたのだ。さすがに気分が塞いでくる。

「ほう、そうかい。実は俺もなんだ。俺は、ついこの間まで船乗りをしていたんだが、さすがに三週間も霧の中だと腐っちまう。いや、

船乗りとして仕事をしているのならまだマシなんだが、客として船に乗っていると本当にやる事が何にもなくてなあ。霧だらけとはわかっていても、表へ出ずにはいられんさ」

彼は古ぼけた外套の腰あたりを掻きながら、あくび混じりに言った。実際、退屈で退屈でどうにもならなくなり甲板に出てきたところ、この珍しい出で立ちの少年に出会ったのである。

「俺は、レリオン。レリオン・ハイガード。君は？」

「あ、申し遅れました。ボクはパピル・パピルスです。レリオンさん」

大人の魔法使いは畏怖の念をもって対応される事も稀にはあるが大抵は奇異な目で見られる場合が多い。しかし子供の見習い魔法使いは、みな概ね好意的に接してくれる。ちょっとした手品師程度と思われているようだ。パピルが少年の容姿で旅を続けている理由の一つがそこにある。

「じゃあ、パピル君。ここで知り合ったのも何かの縁。これから少し早めの夕食でも一緒にどうだい。もちろん俺のおごりだよ」

レリオンはちょっとオドケた調子で、パピルにウインクする。どうやらレリオンの方もパピルの事を一目で気に入ったようだ。長い間、船乗りをやっていると様々な人に出会い、様々な経験をする。そういつた事からパピルを良き旅の道連れとして認めたのだろう。

「喜んで、ご一緒します。実は旅費が足りなくなりかけていたので助かります」

パピルはローブの袖を振り、懐具合が寂しい事を強調する。事実、パピルは手元不如意といってよい状態だった。明日、ホンザ港に降り立っても、すぐにはセルフオードへ旅立てまい。たとえ大魔法使いであっても、金持ちとは限らないのである。魔法を習得した者の中には、その能力を合法的、もしくは非合法的に使い、金儲けをしている連中もいる。パピルも昔は儲けるといっただけではないが、魔法を使って生計を立てていた時期もあった。しかし今は、しがない放浪の身。安定した収入などあるはずもない。

そりゃあ、幻の金貨を出すくらいはパピルにとって何の造作もないが、パピルにそれをする悪意は、かけらもなかった。ホンザに着いたら街の魔法ギルドを訪ね、仕事を紹介してもらおう事になるであろう。セルフオード行きは、当座の資金を稼いでからだ。

「じゃあ、行こうか。パピル君」

レリオンは大変機嫌良さそうにパピルの前を歩きだした。どうやら単にパピルを気に入った他に、この魔法使い見習いを食事に誘った理由がありそうだ。

「くん、は辞めて下さい。パピルで構いません」

前を歩くレリオンの広い背中に向かって話しかけるパピル。実際にはパピルの方がレリオンより遙かに年上なのだが、仲良くなりたいたいと思っている者から変に遠慮をしたような呼ばれ方をされるのは、パピルにとって余り愉快な事ではなかった。

「おお、そうかい。じゃ、遠慮なくパピルって呼ばせてもらおうぜ。でも、だからと言って俺の事をレリオンちゃん、なんて呼んだら、海に放り込んでしまうからな」



レリオンの冗談に二人はカラカラと笑った。もつと早く出会っていたら、双方にとつて、この船旅はずっと楽しみものになっていたであろう。しかし、人生は得てしてこんなものである。むしろ旅の最後の一日であっても、出会えた事に感謝する。二人は長い経験から、それを肌で感じ取っていた。

## 魔法技師

パピルとレリオンは船内のレストランへ向かうため、階下へ通じる出入り口へと歩き出した。甲板には彼らの他に十数人の客がいたが、船を取り巻く霧を見るためにワザワザ甲板に出てきているとは思えない。彼らも外へ出なければやっていられないという気分なのだろう。その気持ちはパピルたちにもよくわかった。

どうしてこの船には見るからに屈強な男たちが多いのだろうか？パピルは乗船以来、不思議に思っていた疑問について考えていた。ふつつ乗客には様々な種類の人がいる。旅行者、商人、里帰りをする軍人等々。しかしこの船の乗客内訳は、明らかに異様だった。客の約半数以上が、いかにも言った荒くれ風の男たちなのだ。よく考えてみればレリオンも例外ではない。

甲板への出入り口から、下へ向かう階段にさしかかる。パピルの乗る旅客船ポネケウレ号はかなり老朽化した船で、おそらくあと二、三年で廃船となるだろう。旧式の船によく見られる「雑魚寝部屋」が多数配置されており、屈強な男たちの殆どは、そこで寝泊まりをしているようだ。甲板はもちろん、船内の至る所に彼らはたむろし、一種異様な空気を醸し出している。とてもではないが、家族連れが気軽に船内を散策できるような雰囲気ではない。

甲板より一階下に降りたところでレリオンが雑魚寝部屋の方を指さす。そこには四十人ほどが雑魚寝できそうなスペースがあり、そこに寝泊まりをしているだろう客たちの荷物が、あちこちに散らばっていた。まあ、貴重品は船内の保管室に預けられるのだが、有料なので雑魚寝部屋の客たちが使うことは希だ。みな貴重品は肌身離さず持っている。

「ほれ、あのむさ苦しい雑魚寝部屋を見るよ。あの中で三週間も何もせずに過ごしていたなんてなあ。この船に三つある雑魚寝部屋の中で、一番人数の多い部屋を割り当てられちゃった。運が悪いぜ」

レリオンが毒づく。確かにあの部屋に三週間もいたら気も滅入るだろうとパピルは同情した。

「そついえばパピルは個室かい？ 航海中に君を見ることがなかったけど」

そう言いながら、元船乗りの男は外套のポケットの中を探る。どうやら財布を確認しているようだ。

「ええ、二等個室のほうに泊まっています。本当は僕も料金の安い雑魚寝部屋のほうを希望したんですけど、旅券の発行所で断られてしまいました」

「ああ、旅費が足りなくなっているというのは、そついう事か」

レリオンの推測は正しかった。二等とはいえ、個室料金は雑魚寝部屋の五割増しだ。三、四日の船旅ならともかく、三週間の長旅となると差額はバカにならない。

「ええ、旅券の発行所で雑魚寝部屋を申し込もうとしたら、係りの人がこう言っんです。今回は荒くれ風の男たちが大勢で雑魚寝部屋に乗り込んでくる。君のような子供をそんな中に放り込むわけには行かないよ。とてもじゃないが会社としては責任をとれないからね、つて。仕方なく二等個室に乗る羽目になりました」

パピルは口惜しそうにこたえた。そうでなければ旅費を節約でき  
て、ホンザ港に着き次第すぐさまセルフオードに向かえたのだ。し  
かし旅費が底をつきそうな今、ホンザ付近で何か仕事をしなければ  
ならない。確実性の少ない情報でデュリガルド大陸を目指したもの  
の、やはり余計な道草は食いたくないのである。

「ま、賢明な選択だったな。確かに君みたいな子供が雑魚寝部屋に  
泊まったら、一晩でペシャンコにされてるところだ」

軽口をたたきながら、レリオンが笑い出す。

「ええ、ほんとに。しかしどうしてこの船には、レリオンさんみた  
いな筋骨隆々といった感じの大人の人が多いんでしょうねえ。勿論  
レリオンさんほどではありませんが、僕も結構船旅はしてるんです  
よ。でもこんなことは初めてです」

パピルがこの三週間、ほとんどの時間を個室で過ごしていたのも  
これに関係している。今までの船旅はそれこそ普通の乗客たちが乗  
っていたので、船内をある程度自由に往来できた。魔法使いとはい  
え、子供のパピルに気を留める者は余りいず、いてもちよつと魔法  
を見せてくれといった、たわいもないやりとりをするだけで旅程を  
過ごせていたのだ。

しかしこれだけ曰く付きのような男たちが密集した中ではそも  
もいかない。パピルが知っているだけでも、この三週間に五回の喧嘩  
騒ぎが起きていた。無理もない。何せろくな娯楽施設もない旧式客  
船のうえに、海上は常に霧ばかり。これでは大抵の者がムシヤクシ  
ヤしてしまうだろう。そんな中を魔法使いの子供がウロチョロして  
いたら格好の暇つぶしの道具にされてしまう。

もちろんどんな大柄な大人であろうとも、パピルの魔法の敵ではない。しかしそんな事をすれば狭い船の中、たちまち評判がたつてしまい、色々と面倒な事態に陥ってしまうのは目に見えている。そんなわけで、パピルはトラブルを避けるため、旅程の殆どを個室に閉じこもって過ごしていたのだった。

旅券発行所で大人の姿に戻ってチケットを買えば雑魚寝部屋へ泊まれたのかもしれないが、喧嘩騒ぎの多さを考えると子供の姿で個室にいたのが正解だったとパピルは感じていた。いい大人が、ほとんど三週間も個室に閉じこもりっぱなしでは一寸と不自然であり、周りの注意を引く可能性が高い。トラブルを避けたいパピルとしては都合が悪い事となる。

「まあ、雑魚寝部屋にいる奴は、元々、金を持っていないか、金を使いたくない連中だからなあ。金が入るまでは、じっと我慢の子つてところだろ」

「金が入るまで？」

パピルは意外な答えに思わず聞き返した。

「ん？ い、いや、多分そんなところだと思っただよ、一般論としてさ」

慌てたようにレリオンは両手を外套のポケットから出し、大げさに動かして見せた。

レリオンが何かを隠しているのは明らかだったが、パピルはそれ以上聞くのをやめた。人にはそれぞれ事情というものがある。レリオンも例外ではないだろう。そんな事でパピルは折角の有意義な出

会いを壊したくはなかった。

ぎいぎいと年月を感じさせる音を立てる廊下を歩きながら、船の副制御室がある部屋を横目を通り過ぎようとした時、二十歳そこそこの青年が二人に声をかけてきた。

「やあ、レリオンさん。これから食事？ オレも一緒にいいかな。あれ、パピルも一緒なの？ 二人は知り合いだっけ」

その青年は短くも素直なストレートの髪をなでながら、二人に近づいてきた。

「よお、グンパ。仕事はもう終わったのか。ちょいと早いけど、さつき知り合ったばかりの若い友人と夕飯さ。パピルの名前を知っているって事は、おまえたちも知り合いかい」

レリオンが話をはぐらかすのに、丁度いいタイミングで出てきたこの青年。名前をグンパ・セルテムといい、この船で魔法技師の仕事をしている。魔法技師は魔法使いと違い、魔法自体は使えない。しかし魔力が詰まった器「魔具」を扱う専門家で、グンパはこの船に搭載されている推進力に関連した魔具「動船具」を管理する魔法技師だった。

「ええ、主任に今夜は徹夜になるから少し休んでおけて言われましてね。とっとと晩メシ食って仮眠をとろうと思ってたんですよ」

グンパは作業用の手袋を取りながら二人のそばに近づいてきた。いかに老朽船とはいえ、弱冠二十歳で動船具の管理に携わる仕事が出来るといのは、彼がかなり優秀だという証だ。しかし見た目や態度にはその事をおくびにも感じさせず、どこにでもいそうな陽気

な青年といった印象である。そのカラツとした性格はどこかレリオンに通じるところがあった。

「そうそうパピル。この前、君にアドバイスされたところ、少し調整したら途端に直つちやつてさ、主任に誉められちまったよ。君が自分の事は黙っていてくれと言ってたんで、主任には何も話さなかつたけど、いいのかい。オレの手柄になつてるぞ、いまんとこ」

一緒に食事をする同意を得ていないにも関わらず、ちゃっかりレリオン、パピルと一緒にレストランへ向かう道筋をたどるグンパ。パピルの手柄を横取りしたようなバツの悪さを感じているようで、何ともすまなそうな顔をしている。確かに自分より五つは年下の子供にアドバイスを受けたのは正直おもしろくないのだが、彼は根っからの職人であり、実力のある者ならば、たとえ目下でも尊敬しなければならぬという律儀な考えの持ち主だった。

「うん、もちろん。だって実際に作業したのはグンパでしょ。それならやつぱりグンパの手柄だよ」

見た目はグンパの方が年上なのだが、魔法に携わるもの同士、かなり気安い仲になっている。パピルがグンパと知り合ったのは乗船して間もない頃であった。魔法使いとしては、やはり船に積んでいく魔具は気になるところであり、制御室の外からではあるが、荒くれ男達の間をつき、時たま作業を覗いていたのだ。

ここでもパピルの容姿が子供である事が役に立つ。たとえ老朽船のあけすけとした作業場でも、大人がそれを覗いていたら怪しまれるのは間違いない。だが子供ならば、単に興味本位で眺めていると解釈されるのが普通であり、そんなパピルにグンパが声をかけてきたというわけだ。

グンパとしても仕事上、魔法使いには興味がある。しかし大人の魔法使いには声をかけづらい。パピルが子供であればこそ、気軽に接する事が出来たのだった。



## レストランにて（前書き）

ホント、久しぶりの更新となりました。

## レストランにて

船の中は非常に複雑な造りになっていた。無理もない。この中型旅客船が建造されたのはもう七十年以上前の事だ。しかも当初は軍用輸送船として造られたものである。それが流れ流れて改造を繰り返して、現在は旅客船となっているわけだ。こういった事情がこの船ポンケネウレ号の独特の造りに拍車をかけている。もっとも魔具による構造維持機能がなければ、とうの昔に廃船の憂き目を見ていただろう。

しかしその分、長い歴史を物語る痕跡が船の至る所にあつた。戦争に使われていた時代の弾痕や装甲の修理あと。無計画に船内を改造した事による配管の異様さ。客船に生まれ変わってからも相当な年月が経っている事を感じさせる古びた調度類。しかしそれらは決して不愉快な印象を与える事なく、乗客に不思議な安堵感すらもたらしていた。

レストランへ向かうパピル一行は、そこへと通じる最後の長い通路に達していた。その通路は、おそらくこの船が客船として一番はなやかなりし頃に作られたもので、通路自体は古びてはいるが上質の木材がたっぷり使われており、両側の壁には古代の神々を模した美しい彫刻が施されていた。

ちょっとした船中の冒険を終え、彼らはレストランへと到達する。レストランはこの船の中で一番広い場所だ。客船にするために船を買った主は、相当な金額をかけてこの大レストランを作ったのだろう。かなり古びてはいるが、そこは古くさいというより貴族があるといった方がぴったりとくる場所だった。

金髪のウエイターが彼らに声かける。

「おや、珍しい組み合わせだね。荒くれ男に魔具オタク。それにお子さま魔法使いときた」

このレストランが船で一番楽しい場所になっている理由に、この三十の坂は越えているだろう陽気な男の存在は欠かせない。彼はどこでそれを身につけたのか、様々な客が入り乱れ、本来ならトラブルが耐えないはずのレストランを絶妙な接客で常に平穏なものとしていた。

通常の客船ならば、乗客と乗務員が同じ場所で食事をするという事はある得ない。しかし船長の方針で、客が乗務員をつれて来た時のみ、伴に食事ができるという独自のルールがこの船にはあった。レストランの方が良い食事が出る上に乗務員には割引がきくので、乗務員は何とか乗客と食事がとれるように色々と画策していた。

ゲンパもたまたま知り合ったレリオンに頼み込み、航海中に何度もレストランで食事をしてる。そういう、ざつくばらんとしているという意味では、レストランというより大食堂といった面もちの方が強かった。

「女房に逃げられたみつともない男が何いつてるんだ。もうちよつとお客をお客と思えよな」

レリオンがウエイターの胸を軽くこづく。勿論、親しみを込めた悪口だったが、妻に逃げられたというのは、まんざら冗談というわけでもないらしい。パピルは食事をしている時に、このウエイターがその話を他の客としているのを何度か聞いたことがあった。一緒にいれば奥さんも楽しかろうに、と思われるような気さくな男で

あつたが、男女の仲はそう簡単にいくものではないと、パピルは経験から知っていた。

もつとも見かけが子供のパピルがそんな事を言えば、いっぺんで「生意気な子供」と思われるのはわかっていたので、その事には一切ふれてはいなかったのだが。

ウェイターの案内で三人はテーブルについた。まだ夕食には早い時間だが、レストランは意外と混んでいる。明日の朝早く、ようやくホンザの港に到着する事もあり、みな早くベッドに入る為この時間を狙って食事をしに来たのだらう。

ただこのレストランは船の一部を建て増して作られたものなので、乗客の三分の二が同時に食事を出きるくらいの広さはゆうにあり、そのためさして窮屈さを感じさせない。

ヒョロツとした痩せ型のウェイターが早速注文を取るために口を開いた。

「レリオンは、まず酒だよね。いやいや言わないでもわかってるさ。僕は一日以上つきあったお客の好みは即座にわかってしまうんだ。でもあんまり飲み過ぎないでほしいな。みな今夜は盛大に騒ぐだろうからさ。この長く退屈な旅の終わりを祝ってね。だから酒豪のあなたが残りの少ない酒樽の中身を空にしちまったら困るんだよ」

「わかってるさ。俺も今夜はあまり呑む気はないよ。せつかく最後の夜に知り合った将来高名になるだろう魔法使い君の前で、醜態はさらしたくないからな」

レリオンがメニューを見ながら話す。パピルはちょっと気恥ず

かしい思いだった。何故ならパピルは既にかなり「高名な」魔法使  
いだっただからである。もつとも今の姿でいる分には、ほとんどの者  
はその事に気がつかないであろうが。

「で、将来有望な魔法使い先生は何にする？　いつものように、ゴ  
レドン牛のモモの甘辛煮とフォルゼン風味のサラダかい」

ウエイターが喋り終わるかどうかのタイミングで、レリオンが  
口を挟む。

「へえ、パピルは結構大人の味が好きなんだな。俺がゴレドン牛  
の良さをわかったのは二十代も半ばをすぎた頃だったぞ」

パピルは少し慌てた。確かにゴレドン牛の味は癖があつて、子  
供で好きな者はほとんどいない。パピル自身もこの牛の味の良さに  
気がついたのは、実年齢で二十二、三の頃であつた。乗船して間も  
ない頃は、怪しまれないために、いかにも子供が好きそうな料理を  
注文していたのだが、今回のように部屋に閉じこもらざるを得ない  
旅では、食事が何よりの楽しみである。パピルはついつい誘惑に負  
けて、好物を注文するようになっていたのだった。

「え、ええ。見習い魔法使いは修行の旅で色々な所へ行くんで、あ  
んまり食べ物好き嫌いは言えないんですよ。ある町ではゴレドン  
牛ばかりを食べなくてはならない羽目になりましたね。それですつ  
かり慣れて好きになってしまったんです」

いいわけがましくパピルが答えたが、実際この話は真つ赤な嘘  
である。ウエイターが注文をメモしながら、今度はゲンパの方に声  
をかけた。

「グンパは、ソレポリ鶏の卵包みとオレンジのゼリーだよな。二十歳も超えようつてのに、まだママの料理が忘れられないってか」

「うるさい。ソレポリ鶏の卵包みは、ホンザの郷土料理で、地元生まれはみんなこのお袋の味が好きなんだよ！」

年下のパピルが好む大人の味と比較されたようで、グンパはバツが悪いようだ。そしてそれをごまかすようにパピルに話しかける。

「お、今夜はオレがパピルの分、ご馳走させてもらうよ。アドバイスをもらったお返しにさ」

若い魔法技師はどうかパピルに借りを返したいようだ。このままパピルが船をおりてしまえば、この先ずっと何か心の中にモヤモヤが残りそうだと考えての事だろう。

「おい、まてよ。パピルにおごるのは俺の方だぜ。今さっきパピルと約束したばかりだ」

メニューを見ていたレリオンが慌てたように割り込んでくる。しかしグンパも引き下がらない。

「何いつてるんですか、レリオンさん。オレがパピルの世話になったのは、あなたがパピルと約束したよりも前ですよ。オレの方がパピルにおごる優先権があります」

グンパが、今一つ説得力のない主張をする。

「おまえ、大人に逆らうなよな。パピルにおごるのは、この俺だ」

「いいえ。レリオンさんだって、海の男だったわけでしょ。だってら船の上で受けた恩義は必ず返さなきゃならいってのはわかってるでしょうが」

こうなるとグンパも意地になってくる。二人が自分の事でもめるのは本意でないパピルだが、悪い気はしない。でもこのままでも困るので、二人の間に割ってはいる。

「あ、二人とも喧嘩しないでください。ボク、自分の分は自分で払いますんで」

「うるさい！ 子供は黙ってる」

レリオンとグンパがほぼ同時に怒鳴った。そして顔を見合わせ、て笑う二人。

「グンパ、船の上の借りっていうんならよ。お前、俺に借りがあるんじゃないのか」

レリオンが不敵に笑う。

「え、借りって何すか、借りって」

グンパが慌てたように声を発した。どうやら思い当たる事があるようだ。レリオンが間髪入れず畳みかける。

「ほれ、出航してまもなく起きたあの事を忘れたわけじゃあるまいな。俺とお前が初めて出会ったあの時の事をさ」

「いや、それはそうなんだけど……。今、それを持ち出すかなあ。レリオンさん、大人げないっす」

どうやら二人にはなにやら因縁の出会いがあったようだ。パピルはにわかに興味がわいてきた。この愛すべき旅の道連れ達に何が起こったのか。

「あら、あなた達も来ていたの。最後の夜に偶然だわね」

突然背後から若い女性の声がした。パピルが振り向くと、そこには年の頃二十五、六の長身の女性。赤いショートドレスに明らかに派手目の化粧をしている。”姉御”という言葉は正にこの女の為にあるといった風貌の人物だ。

「お、アンタはあの時の。あれ以来、一度も船の中で会わなかったなあ。もっとも無粋な野郎ばかりが多いこの船では、アンタみたいな美人はあんまり出歩かない方が賢明だろうがね」

どうやらレリオンに恰好の援軍が現れたようである。

「あなたのようないい男に美人って言われるのは悪くはないわね。ところで隣にいるのは、あなたの息子さんかしら？ 子連れには見えなかったけれど」

その女はパピルの方を興味深そうにのぞき込んだ。

「いや、違う違う。さっき甲板で知り合ったばかりさ。でも、こういう息子がいるのもいいかもな、男親としては」

一瞬レリオンの表情が曇ったのをパピルは見逃さなかったが、



考えを進めるまもなくレリオンが続ける。

「おう、ちょうどいいや。アンタ、パピルに話してやってくれよ。あの時の事をさ。この魔具オタクに思い出させてやるためにも」

「オタクじゃありません！ 魔具の求道者って言って下さい」

グンパがくっつかかる。

「ええ、いいわよ。あの時のお礼代わりにね。いい、魔法使いの坊や、あれは……。あ、ウェイターさん、わたしにシャンパンを持ってきてくれるかしら。話し終わったらきつと喉が渴いているでしょうからね」

女が流し目がちに、ウェイターへ注文をする。

「はい、かしこまりました。じゃあ、他の三人もさっきの注文内容でいいよな。レリオンはそれにプラスして、ツマミに鶏皮のフライってところで」

気のせいかな少し頬を赤らめた金髪のウェイターは、厨房の方へ向かって歩き出す。女は空いている席へとけだるそうに座り、頬杖をついた。

「あれはねえ……」

女が話し出す。

## 出逢いの回想

その日、空は青く晴れわたり、絶好の航海日よりなった。中型旅客船ポンケネウレ号がスダバラギの港を出港してから一日半、乗客は皆これから始まる三週間の船旅に期待と不安を抱いていた。単に三週間の船旅は珍しくないが、それが無寄港となれば話は別である。

スダバラギから目的地のホンザ港までの間には一応いくつかの島はあるのだが、住人達はよそ者が上陸する事を極端に嫌っていた。かつてこの地域は大陸間戦争の主戦場となった事があり、群生する島々では両勢力によって徹底的な懐柔と破壊が行われたのである。その時の事情を先祖代々伝え聞いている島の住民たちは、決して誰にも組さない事を固く誓い、島々が準国家の形態をとる事によっていかなる者の不当な進入をも許さない状況となっていた。

ただ輸送船や旅客船への物資の供給は島々の財源の一つとなっていたので、沖合に停泊した客船などに物資を運ぶ仕事は行われている。運搬船に乗ってきた島民とのトラブルを避けるため、物資の供給を受ける間は乗客は船の中に留めおかれ、甲板などに出る事を禁じられていた。そうなると乗客は掛け値なしで三週間ものあいだ船の中に閉じこめられ、同じ顔を見続けて暮らさなくてはならなくなる。

商業船であればそのような状況はいくらでもあるのが、一般人が乗り合わせる旅客船であると、これは結構厳しい状況である。しかし他のルートをたどった場合、ゆうに倍の時間を要する事から、旅程に余裕のない客はこの船に乗るしかないのであった。

一週間もすれば海の景色にも飽き飽きして、ほとんどの客は甲板へは出て来ない。しかしまだ航海が始まったばかりという事もあり、多くの乗客が各所の甲板で思い思いの楽しみ方をしていた。ただ海を眺める者、燦々と陽光のふり注ぐ中、ゲームに興じる者、これからの航海について色々賭けをする者、様々である。

そんな中、昼日中より深酒をし、既に泥酔状態にある男達がいる。彼らは三人のグループで、リーダー格はドギドルという男。三十過ぎのポツテリとした体型の人物だ。しかし単に肥満体というわけではなく、明らかに筋肉をともなつた肉体で、いくつもある体の傷や、そのふてぶてしい顔つきから、危険な男である事は誰の目にも明らかであった。他の二人は正にドギドルの子分といった感じであり、ドギドルよりはマシに見えたが、それでも十分に危険な小悪党である事に違いはない。

彼らを通る所、他の乗客はトラブルを恐れ誰もが道をあけた。それを良い事にドギドル達はまるで王様のように闊歩する。船には荒くれ風に見える男達も結構乗りあわせていたのだが、その者達から見てもドギドル一行は危険な存在に見えるらしく、みな見て見ぬ振りをしていた。

「おう、金儲けの話でもなければ、こんなチンケな船には乗らねえんだがな。仕方ねえや、せいぜい三週間好き勝手に過ごさせてもらうか」

既にロレッツが回らなくなりかけているドギドルが大声でしゃべる。

「そうですね、アニキ。見たところ軟弱な奴らばかり乗り合わせているようですから、存分に楽しみましょう」

「ほんとほんと。ドギドルさんの貫禄は、もう船長以上ですよ。誰も逆らえる者などいやしませんが」

二人の子分はドギドルの機嫌をとるのに余念がない。矮小な悪党たちではあるが、ドギドルのそばにいる事で少なからず良い思いをしてきたようだ。

「うん？ そうとう酔っちゃったかな。あそこに随分とアカ抜けた女がいるように見えるぞ」

ドギドルが目をこすりながらつぶやいた。

確かに彼の十メートルばかり先のテーブルに一人の若い女性がついている。出航したスタバラギも到着先であるホンザも、かなりの田舎町だ。ましてや無寄港で三週間の船旅という悪条件を顧みず、この船に乗るといふのは余程の事である。そう考えると今ドギドルの目の前にいる女性は場違いと言っていいほど、派手な上に都会的であった。

「いえ、相当にいい女のようにみえますが、ドギドルさん。あんな女を見るのはグラハーゼの都いらいの事ですよ」

子分の一人がドギドルにすり寄った。

「ほう、そうかい。いやスタバラギに近づくとつれてほんとに箸にも棒にもかからないような田舎女ばかりしかいなかったからな。こつちも相当、欲求不満になっちまってる。よし、お前ら見てる。俺様の魅力であの女を一瞬でモノにして見せてやる」

酔いがまわり相当に赤ら顔になったドギドルの顔が更に赤くニヤケていった。颯爽とテーブルに近づいていくドギドルたち。その短い道のりの間にも良からぬ妄想が彼らの頭の中をかけめぐっていた。

「よお、ねえちゃん。ここらではお目にかかれねえよない女だな。ここで会ったのも何かの縁。この先、三週間、一緒に楽しく過ごさねえか」

テーブルから一メートル程度離れたところに立ち、ドギドルは自信たつぷりにそう言ったが、女はイチゴジュースのストローを口にしたままドギドルたちを無視している。

「おお、俺様が恐ろしくて声も出ないと見える。いや、安心していいぞ。こう見えても俺様は女にはとても優しいんだ。怖がらずにこっちを向いてくれよ」

女は変わらずジュースを飲み続けていた。

「てめえ！ こっちが優しく話しかけてやっていりゃあ、いい気になりやがって。どういっつもりだ」

酔いも手伝い、激高するドギドル。周りには大勢の乗客がいたが、後難を恐れて誰も間に入る者はいない。いつの間にか女のテーブルの周りからは乗客はいなくなり、ドーナツの穴のようにスッポリとその空間だけがあいていた。

それに勢いづいた子分もすかさずフォローに入る。

「そうだぜ。ドギドルさんが大人しくしている内に言う事を聞いて

おいの方が身のためだ。お前は知らないだらけどな、この人は百人殺しのドギドルと呼ばれた人なんだぞ。お前なんか一瞬でひねり殺せちまうんだぞ」

実際にはほとんどが「半殺し」なのであるが、何人かは本当に死なせていても不思議ではない。少なくとも観衆になった乗客達にはそう思えただろう。そんな中、しびれを切らしたもう一人の子分が、女の腕を掴む。

「このアマ、いい加減にこつちを向いたらどうなんだ」

子分がそう言い終えるかどうかの刹那、女の腕が一瞬動いたかに見えたのとほぼ同時に、その男はもんどりうって甲板に倒れ込んだ。

それまで座っていた女性がいつの間にかドギドルの正面に立っている。確かに大した美人ではあるが、頑強な意志を持ち合わせているであろう鋭い眼をしていた。

「いい加減にして欲しいのはこつちの方よ。どこのウマの骨、いやブタの骨か知らないけど、あんたたちが側にいるだけで臭くてたまらないわ。私の十メートル四方に近寄らないでくれる？」

派手ではあるが、決して下品ではないドレスを着た女は、驚くほど威勢のいい啖呵をきった。

「何い、俺様をなめんじゃねえぞ！ もう許さねえ、その顔、二目と見られねえようにグチャグチャにしてやる」

ドギドルは持っていた酒瓶を女の方へ投げつけた。難なくよけ

る女。酒瓶が砕け散り、野次馬の中から何人もの悲鳴が聞こえる。百人殺しの名に恥じぬ凄まじい勢いでパンチを繰り出すドギドル。しかしそれをことごとくよけていく女。こうなると、彼女がただの突っ張った女でない事は誰の目にも明らかだった。

「ねえちゃん、逃げるのは得意らしいなあ。今までお前に迫ってきた男からはうまく逃げられたかも知れないが、今度はそうはいかねえぞ」

ドギドルは益々凶暴化し、拳や蹴りを繰り出してくる。酔っているせいもあり正確さには欠けるのだが、一発でも当たったら只では済むまい。女はただ逃げるだけが精一杯の様に見えた。騒ぎを聞きつけたのか、周りの観衆の輪は更に大きくなっていく。

「そろそろ決着つけようや。俺をこれだけコケにした代償は大きいぞ」

さすがに疲れたのかドギドルはそう言つと、ニタリとイヤな笑みを浮かべた。彼の猛攻に気を取られていた隙に、子分たちが女の背後に回り込んでいたのだ。

「あっ」

初めて彼女が発した女性らしい声だったが、状況は女にとって最悪になったかに見えた。女は子分たちに両腕を掴まれ、まったく身動きがとれなくなっている。

「へへっ、さつきはよくも投げ飛ばしてくれな。これから俺の代わりにドギドルさんがタツプリアお前を可愛がってくるぜ」

先ほどひどい目にあつた子分が、貧相な顔を女に近づけながら毒づいた。

「ドギドルさん、早くこの女、めっちゃくちゃにして下さいよ」

投げ飛ばされた男が何とも嫌な笑い方をしながらドギドルに懇願する。余程腹に据えかねていたのだろう。女の腕と肩をがっしり掴みながら凄まじい目で彼女の顔を覗き込んでいる。男の頭の中では、これから起こるであろう惨状が、強い快感を伴う妄想として渦巻いているのだろう。

遠巻きに見ている他の乗客の中には泣き出す者、気分を悪くしてうずくまる者、自分に責任はないとでも言いたげに、この場を去る者、様々だ。誰一人として船の警備員を呼びに行こうとする者はいない。その事が後でドギドル達に知られたらどんな仕返しがあるかわからないためだ。何せこれから三週間、同じ船に乗っていないければならないのだから、逃げ場はどこにもない。

ドギドルが女の方へにじりよって行く。古びた甲板は小さな悲鳴を上げるようにミリミリと嫌な音を発し、あたかもそれは哀れな女への別れの歌のようにも聞こえた。

「へっへっへっ。さあ、覚悟しな、威勢のいいねえちゃんよ。俺に逆らつた事をこれから存分に後悔してもらうぜ」

ドギドルの赤ら顔は更に紅潮し、勝利とその後の極上の褒美、つまり美女の顔を二目と見られないようにするという残虐な行為に、彼は言葉では表せない何とも言えない恍惚感に浸っていた。

ドギドルは甲板に転がっていた酒瓶を手に取り、それを倒れた



テーブルの端で割る。それがこれから始まる残虐ショーに欠かせない道具になる事は、誰の目にも明らかだった。

「へへ。それじゃあ、最後にその綺麗な顔をじっくり眺めておこう。五分後にはこの世で一番醜い顔になっているだろうからな」

ドギドルが女の顔先十センチのところまで、その赤ら顔を近づける。彼は女が恐怖にうち震えている顔を期待していたのだが、女の顔に恐怖は全く感じられなかった。

「詰めが甘いよね」

女が小馬鹿にしたような顔で、しれっと言う。

「なに？」

ドギドルが言い終わるかどうかのタイミングで、女は彼の目に向かって唾を吐きかけた。

「ぎゃっ！」

ドギドルが顔に似合わぬ悲鳴を上げ、目を抑え前かがみになる。相当に苦しいようだ。ただの唾が目これだけのダメージを与えるわけではない。女はドギドルの攻撃をよける合間に指輪に仕込まれた小さい丸薬を口に含んでいたのだった。その丸薬は唾液と反応し、かなりの刺激物となる。それは口中では多少ピリピリする程度だが、目に入れば激痛を伴う成分で出来ていた。

女はそのチャンスを逃さない。両腕をがっしり捕まえている子分達に体を預け、左足で思い切り地面を蹴る。子分達が掴んでいる

腕を中心にして女の下半身がクルリと円を描くように中へ浮かぶ。そしてドギドルの顔めがけて思いつきり右の蹴りをたたき込んだ。

「ぐおっ」

蹴りそれ自体は凄まじい威力とは言い難かったが、目の激痛にパニックを起こしていた上に泥酔状態のドギドルは二、三步後ずさり甲板に倒れ込んだ。

「ちきしょう、目が見えねえ。どこだ、どこにいやがる、クソアマが」

前のめりになりながら何とか立ち上がり、逆襲しようとするドギドル。しかしまともに目も見えず、女とは反対の方向へフラフラしながら歩いていった。観衆は皆なにか起こったのかまるでわからない様子である。それはそうだろう。気丈な女性がならず者にひどい目に遭わされようとしていたのに、突然大男がもんどりうって倒れ込み、苦しみもがいているのだから。

「アニキ、こつちです、こつち！ 逆方向です」

自分の一人が叫ぶ。女の行動に一瞬とまどったものの自分の仕事は忘れてはいない。女の腕を前よりも強く掴まえ拘束している。抵抗する女だったが、さすがに大の大人二人にガツチリ両腕を掴まれていては、身動きとれない状態のようだ。しかし自分達もどう動けばよいのか判断できかねていた。

ドギドルを助けに行けば女の拘束を解かなければならない。あれだけの事をやってのけた女だ。一人では御しがたく、今の体勢を変えるわけにはいかない。さりとてドギドルが錯乱し彷徨している

のを黙って見続けているわけにもいかない。

「ちっ、ようやく少し見えてきたぜ。あゝっ、うっとうしい。涙が止まらねえ」

刺激物の効果が切れてきたのか、少しずつ視界が開けてきたドギドルであった。しかし全く正常に戻ったというわけでもない。依然として千鳥足が続いている。

その時である。女の方へ戻ろうとしたドギドルに不運がおそった。甲板の段差のある付近まで迷い歩いて来てしまった彼が、おぼつかない足取りのために下る階段を踏み外してしまったのだ。十段はある階段を転がり落ちていくドギドル。更にその時、船が大きく揺れ、観衆の方へ勢いよく転がっていった。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5277p/>

---

パピル・パピルスの魔法旅行記 ホンザの道標

2011年10月6日16時12分発行